

の嘘をつゆ知らず情を深めていく弘——2人はまるで親子のような関係を築いていく。しかし、はかない嘘の上に築いた幸せは長く続かず、チェン・リャンを追う警察の手が迫り、すべてを清算する日がやってくる。その時、二人はお互いのためにある決断をする——

島国の日本では、ヨーロッパほど大量の移民問題や難民問題そして違法な移民問題は深刻ではない。しかし、技能実習生として日本にやってきた外国人、とりわけ中国人の違法就労問題や不法滞在問題はあちこちで起きている。そんな時代状況の中、そんなテーマに切り込んだ本作のチャレンジはすばらしい。その結果、チラシには「世界の映画祭を席捲した、圧巻の長編デビュー作」の見出しが躍っているが、どうやら受賞は東京フィルメックス観客賞受賞だけのようだ。しかし、その狙いと出来栄に私は興味津々！

■□■タイトルの意味は？優しい共犯者ならOK？■□■

本作の原題は『Cheng Liang』、そして英題は『Complicity』だが、邦題には、『コンプリシティ』の後に「優しい共犯」というサブタイトルが付いている。それは一体なぜ？また、コンプリシティとは、共犯、共謀、連座の意味だが、私を含めて大学までの英語教育を受けた者のうち、どれぐらいがその単語の意味がわかるのだろうか？

本作公開直後の1月20日付読売新聞には、「偽装留学仲介で処分」「甘い誘惑で高額手数料 留学ベトナム人借金背負い不法滞在」の見出しが、1月21日付読売新聞には「日本語試験替え玉横行」「ベトナム『人民証明書』に別人写真」の見出しが躍ったが、この記事のような「偽装留学問題」や外国人の「違法就学問題」は日本国にとって重大な社会問題であり、違法行為だ。それなのに、近浦啓監督が『Complicity』と題する映画を作り、しかも、そこに「優しい」と形容詞をつけていいの？

後述のように、ゴーン被告の国外逃亡は「出入国管理及び難民認定法」第25条違反の罪だし、それを手助けしたとされる米国籍の3人の男はその共犯者になるはず。それと同じように、中国から技能実習生としてやってきたチェンが、本作冒頭に窃盗犯として実行行為に加担した後、今は蕎麦屋を営む弘の下で名前を偽り蕎麦打ち職人を目指して働いているのは、明らかに違法就労の罪に該当するはずだ。したがって、もし弘がそれを手伝っていれば、弘も明らかに共犯だから、いくら「優しい共犯者」でも、それはやっぱりダメなのでは！

■□■ゴーン被告の国外逃亡とその共犯をどう考える？■□■

2020年のお正月には、「保釈中のゴーン被告が日本からレバノンに逃亡！」のニュースに日本中がびっくり！ゴーン被告は保釈中だったから「裁判の執行により拘禁された既決又は未決の者が逃走したときは」と規定する刑法第97条の「逃走の罪」には該当しない。しかし、「本邦外の地域に赴く意図をもって出国しようとする外国人（乗員を除く。次条において同じ。）は、その者が出国する出入国港において、法務省令で定める手続により、

入国審査官から出国の確認を受けなければならない。」(1項)、「前項の外国人は、出国の確認を受けなければ出国してはならない。」(2項)と定める「出入国管理及び難民認定法」第25条違反の罪に該当することは明らかだ。ゴーンの刑事弁護人だった弘中惇一郎弁護士と高野隆弁護士は現在懲戒申立を受けているが、ゴーンが東京から新幹線に乗って関西国際空港に行き、同空港からレバノンへ逃亡するについての「謀議」は弘中弁護士の事務所で行っていたらしい。もちろん、その席に弘中弁護士も高野弁護士も同席していないから、彼らが「出入国管理及び難民認定法」第25条違反の罪の共犯に問われる可能性は低い。しかし、もし、弘中・高野両弁護士がその逃亡を手助けしていれば、彼らは同罪の共犯になる。そして、現実はその逃亡を手助けした米国籍の3人の男が同罪の共犯に該当することは明らかだ。高野弁護士がブログに「日本の司法とそれを取り巻く環境を考えると、この密出国を『暴挙』『裏切り』『犯罪』と言って全否定することはできない」と記載したことは、「違法行為の肯定とみなされかねない発言で、弁護士全体の信用に関わる」と批判されているが、さて懲戒申立の行方は？

そんな大問題が噴出している中、本作におけるチェンの違法就労の罪と、それを手助けする(?)弘の「優しい共犯」を、どう考えればいいのか？

■店主はなぜ協力を？バカ息子よりよほど愛情が！？■

本作で弘役を演じた藤竜也は、かつて『愛のコリーダ』(76年)で吉蔵役を演じた新進気鋭の俳優だった。それが44年を経た今では、息子から「いつまで蕎麦屋を続けるの？」と詰問(?)され、「それは俺が決める！」と言い返す頑固(親父)ぶりがよく似合う俳優になっている。その頑固なまでに一徹な生き方を私は大好きだし、出来の悪い息子に代わってチェンに対してホントの息子のような愛情を感じる姿を私は十分理解・共感できる。

私の友人に蕎麦打ちを趣味としている人がいた。そんな友人がいると便利なもので、事務所で開いた天神祭パーティーに「蕎麦打ち職人」として来てもらった彼は、朝からラストまで大奮闘！出来立てのおいしい蕎麦は最高だった。彼の話では、蕎麦打ちをマスターするのはかなり難しいはずだが、本作では弘が一方で息子のように可愛がりながら、他方で厳しく仕込んでいくチェンの蕎麦打ちの技量はメキメキと上達していくので、それに注目！このまま順調にいけば、店の承継問題がクリアするばかりか、一緒に北京で日本蕎麦の店を開く新たな夢の実現も・・・？そんな風に弘とチェンの関係が急速に親密になっていく本作後半の展開はほのぼのとした温かみがあるし、藤竜也の芸達者ぶりもあって説得力も十分だ。しかし、ある日遂に店までやって来た刑事が、店の外で対応したチェンに対し弘の出頭を求めると・・・？本作ではそこからが大問題で、法治国家である日本の一国民として守るべき法的義務は守らなければならないのでは？

その点について、新聞紙評では、例えば山根貞男氏(映画評論家)は、見出しを「食が結ぶ店主と青年の心」としたうえ、「祖母と蕎麦屋の店主が、心ある一徹さという点で好一

対をなす。」「彼は、店主は、どう対処するのか。見ていて胸が締め付けられる。」と書き、店主と青年の心に寄り添っている。しかし、ホントにそれでいいの？ 弁護士の私に言わせれば、少なくともチェンが違法就労の外国人らしきことがわかり、警察がそれを追及しようとしていることがわかった時点で方向を是正し、警察に協力すべきが当然では？ また、少なくともチェンを雇い入れるについて、パスポートのチェックをきっちりすることは、外国人を雇用する人間として最低限の義務なのでは？

■□■葉月との恋は？テレサ・テンの名曲は？■□■

本作は、弘とチェンとの実の父子の情愛にも似た（いやそれ以上の）心の交流をテーマにした問題提起作。しかし、それだけでは固すぎて若者受けには不十分と考えた（？）近浦啓監督は、本作中盤にチェンと画家を志す美大生・中西葉月（赤坂沙世）との淡い恋模様を挿入した。2人の出会いは、チェンが出前の蕎麦を、自分のデッサン室で創作に励む葉月の元に届けたこと。普通はそれだけで男女の交流や恋模様が生まれることはあり得ないが、本作では、たまたま葉月が北京に留学するべく中国語の勉強をしていたこともあって、積極的にチェンに話しかけたことで接点が生まれ、それが次第に恋模様に進展していくことに。もっとも、極めて不安定な身分であるため生きていくだけで精一杯のチェンにとって、葉月との恋模様をいかに進めていくかまで頭が回らないのは当然。したがって、2人の恋が空回り（葉月からの一方通行）になるのはミエミエだ。そのうえ、私がこの展開を見て不思議に思ったのは、葉月の周りにはまともな日本人のボーイフレンドが1人もいないこと。これは、弘が自分のバカ息子に見切りをつけたのと同じように、葉月の周りの日本人の美大生もバカばかりだったため？ そう考えると、その面からもこの国の未来にかなり心配が・・・。

それはともかく、私が本作に親しみを覚えたのは、チェンと葉月との交流のきっかけに、テレサ・テンの名曲『我只在乎你』が使われたこと。これは『時の流れに身をまかせ』のタイトルで日本でも大ヒットした名曲だが、中国でも大ヒットしたため、私が『月亮代表我的心』に続いて中国語の勉強を兼ねてマスターした曲だ。デート中の2人（？）の間にこの曲が流れ、葉月が「あ、私この曲知ってる」と言った途端にチェンがそれを中国語で歌い始め、「中国人なら誰でも知ってるよ」と返したところから、それまで2人の間にあった垣根が一気に取り払われてしまったから歌の力は大了なものだ。そんなこんなで始まったチェンと葉月の恋模様は、葉月が北京に留学した後もしっかり継続できるの？

■□■日本で活躍する中国人の目からは？■□■

私は中国語の新聞『関西華文時報』を読んでいるが、そこには林港人氏が書く「華流百花繚乱」があり、その第22回では本作を取り上げている。そして、その中で、「普段、映画評論家であると同時に不動産事業に携わり、また、自身もマンションを経営している」

彼は、まず「もし、私が経営するマンションに不法滞在者がいたら、そりやもう大変なことになる！」「そんなものは『国籍の壁を越えた美しい心の交流』どころか、私は不法滞在している外国人を匿っていることになるので、日本の法を犯し、犯罪に加担していることになるのだから、とんでもないことなのだ！」と書いている。

そして、その上で、本作が犯罪を美化していることを弾劾し、「だから、この作品のように美談にしてはならないのだと強く断じたい！本作を観て感動したと言うのなら物事の本質を見誤っていることになる。」と結論づけている。私は、この評論（批判）に大賛成だ。

■□■共犯を越え犯人蔵匿罪に！こんな結末でいいの？■□■

今は弘に代わって厨房で蕎麦打ち作業を行っているチェンの周りには当然包丁もある。そこで弘は、店の前までやってきた刑事に対して、「蕎麦打ち作業が終われば連れてくるので、しばらく客席に座って待っていてくれ」と申し入れたが、その裏でチェンに対して「出前にいけ」と命じたからアレレ。しかもその肩には店の売上金を入れたバッグをかけてやったから、これでは口で言わないまでも「逃亡しろ」の意思表示がミエミエだ。

前述のように、ゴーンの国外逃亡に協力していない弘中・高野両弁護士は、「出入国管理及び難民認定法」第25条違反の罪の共犯に問われることはないだろうが、この弘の行動は、明らかにチェンの不法滞在の共犯を越えて、刑法第103条の犯人蔵匿の正犯に該当するはずだ。おいおい、本作はホントにこんな結末でいいの？

2020（令和2）年2月7日記